



元氣とタイムリーな情報を提供する

五十嵐レポート

発行:「町コン」五十嵐 勉 2025年01月27日 第1203号「週刊五十嵐レポート」

蟹の甲羅

渋沢栄一の「論語と算盤」の中で蟹の甲羅の話がある。

「自分を知る」。世の中にはずいぶん自分の力を過信して、実力とかけ離れた野望を持つ人がいる。あまり前に行くことばかり考えて、身の程を知らないと、とんだ間違いをしでかす。私(渋沢栄一)は「蟹(かに)は甲羅(こうら)に似せて穴を掘る」という考え方で身の程に会うようにすることを心掛けています。孔子は「心が望むままに行動してもルールを破るようなことがない」と、つまり「身の程をわきまえつつ前に進むのがいい」と言った。

1月24日付日経新聞の「私の履歴書」(岡藤正広/伊藤忠商事CEO)。

成長を期するなら、やはり財閥系に追い付け追い越せだ。ただし、いきなりトップを狙えと言うと現実味が乏しく社員も本気にならない。身の丈をわきまえながら、もう一步の努力で手が届きそうな目標をいかに作り、組織をそこに導けるか、これが私なりのマネジメントの極意。

ヒントになったのが渋沢栄一著書「論語と算盤」で説いた「蟹穴主義」。蟹は自分の甲羅の大きさに見合った穴を掘る。身の丈にあった行動をとりながら、その甲羅を取り換えて成長していく。

会社の成長も蟹を見習うべき。万年4位の負け癖を取り除くには、小さな成功を積み重ねて社員たちに「やればできる」を実感させることが先決。リーダーに問われているのは、手が届きそうな甲羅のサイズをどう設定するかだ。

最初の甲羅は純利益。粗利益は2位だが経費が大きい。無駄を削れば万年4位は返上できる。次の甲羅は、「非資源でナンバーワン」。資源分野で劣っているため、勝てるところで目標を設定。勝ち癖をつくるために選んだ甲羅。20年6月 商社3冠を獲得。

小さな会社が参考にするのは「自分を知る」。30年近くコンサルティングをしているが、自社をよく知っている社長は多くはない。自社の強みを理解して、強みを活かして、他社より秀出ること。つまり勝ち癖をつくる。そして、身の丈に合った、ちょっと背伸びをする目標の設定。「蟹穴主義」。いいですね。

ちょっと
気になる出来事

私は本業の合間に日本語学校で日本語を教えている。1クラス約20名。ベトナム10名、中国人5名、スリランカ2名、ネパール2名、バングラデシュ1名。クラスは日本の中のアジアである。

彼らの身につけている服やシューズはどこで買ったか聞いてみた。ほとんどの生徒が、「Temu (テム)」「SHEIN (シーイン)」と答えた。中国の越境EC企業。「Amazon (アマゾン)」では買わないのかと聞くと、「Amazon、知らない」と答えた。

日経新聞によると、テム、シーインなどの越境ECは、中国の生産業者と直接取引し、中間業者を省き、「世界の工場」として蓄積された莫大な生産力を活用した中国ならではのビジネスモデルを作った。海外消費者には約7日で到着。小口貨物のため関税がかからない。

日経新聞の記事では、欧米、東南アジアでテムやシーインなど中国越境ECを締め出す動きも出ている。

うちでも妻が柿をとる道具をTemuで送料込み2000円で購入。1回使えればいいと思っていたら、使い勝手が良かった。来年も使える。



一口メモ
知識

行き過ぎに注意

飛鳥(ひちょう)これが音(いん)を遣(のこ)す。上(のぼ)るに宜(よろ)しからず、下(くだ)るに宜(よろ)し。大いに吉(きつ)なり。

(雷山小過 らいさんしょうか)

飛ぶ鳥の鳴き声はするが、姿は見えない。高く飛び過ぎてばかりで止まる場所を得ないのでは、疲れてしまう。飛び過ぎたな、無茶をしたなと思ったら、速やかに力を抜いて地上に降りて休むのがよい。

これはやりすぎを戒める、日常のあらゆる事柄における教訓である。

雷山小過(らいさんしょうか)の卦(か)名「小過」は、少しく過ぎる。日常的な事柄に関して少しずつ行き過ぎや過ちがある時を説く。

「易経一日一言」(致知出版/竹村亜希子)より

●「戦略社長塾東京」小岩校 毎週日曜日・水曜日 午前10時~12時

●「戦略社長塾東京」銀座校、武蔵村山校、豊岡校 開講中。

㈱五十嵐コンサルティングオフィス 〒133-0051東京都江戸川区北小岩6-21-5

TEL03-3659-7703 Fax03-3659-7077 info@igarashireport.com

